

〈内なる他性としての子ども〉 から誕生と死へ

—教育学・死生学・精神分析—

秋山茂幸

1. はじめに

本稿が立つ場所は、教育学、精神分析、死生学が交叉する領域である。教育学、特に人間形成論は、「人が生まれ生き、そして死んでゆく過程を総体として、しかもあくまでプロセスとして保ちながら視野に収めようとする。いわば、写真のなかに固定された人間像ではなく、活動写真によってはじめて動きを保ったまま写し取られた人間像を、人の一生というタイムスパンのもとに掬い上げようとする」¹⁾。本稿の視線は、この「活動写真」の始めの方、既に記憶の彼方へと遠のいた原初のいくつかのシーン²⁾から、さらに遡ってフィルムヘッドの何も焼かれていない暗闇の部分、そしてもう一方の暗闇すなわちエンドマークの先、フィルムのテールへと向けられている。特に、それらが「現在」のシーンにいかにかにインサートされるか、すなわちフラッシュ・バックとフラッシュ・フォワードこそが問題となる。死生学の視座からいえば、子ども時代のシーンを媒介としつつ、人の一生における誕生そして死（もしくは、他性としての死即生としての生命そのもの）が「いまここ」の生に与える意味に関して些少の考察を提示することが本稿の目的である。

ところで、教育という営みに関わる時、教育について何か語ろうとするとき、そこには、かつて自らが教育された者（子ども）であったという記憶、さらには自らの内にある何らかの「子どものような感覚」・「子どものなるもの」・「子ども性」（〈内なる子ども〉と呼んでおく³⁾）が、明示的な形か

つ暗黙の形で、ある「効果」を及ぼしているのではないだろうか。そして、その記憶や感覚は自らが表象しうる限界点のはるか彼方から不意に到来し、自分にとって馴染みのない他なるもののように感じることもあるかもしれない。

本稿は、この「効果」のあり方、そしてその意味について考えるための基礎的な作業であるといえる。その際、手がかりにしようとするのは精神分析という思考の経験⁴⁾であるが、これまで教育学において精神分析は単なる参照枠、補助科学として考えられてきた。すなわち、「子どもがいかなる存在であるのか」を捉え、語るための道具立てとして参照され、また子どもをケアし教育する方法の一つとして適用、応用されてきた⁵⁾。

本稿の立場は基本的に、これらとは異なる。それが定位するところは、精神分析を「一つの思考の経験のあり方」と捉える視座から、教育に関する思考の経験のあり方をこそ俎上にもせて再度メタレベルで思考すること、これである。精神分析は、本来、子ども（期）という存在が大人にとってどのようなものであるのか、そして大人はそれをどのように語るのか、もしくは語らないのか、についての思考の経験であり、それは教育に関する営み、語りそのものの反省的な捉え直しを迫るものとしての可能性を有している⁶⁾。

そこで、まず先述の「効果」の意味について改めて述べることから始めて、その内実に迫っていくことにする。精神分析といったとき、本稿ではフロイトを中心軸として、その解釈者（主にジャック・ラカン）の議論も適宜参照しつつ考察を展開していく。

2. 精神分析の対象——大人のなかに尾をひくもの

ルイ・アルチュセールは、精神分析の対象に関して端的に次のように把握している。すなわち、それは「誕生からエディプス期の清算までのあいだに、一人の男と一人の女から産み落とされた小さな動物を人間の小さな子どもへと変形する異常な冒険が、その後にも生き残った当の大人のなかに尾をひいている『効果』のこと」であり、「まさしくこれこそ無意識という単純な名前を持った精神分析の対象なのである」⁷⁾。この「冒険」は、死と隣り合わ

せの人間の戦争であって、人間になったものの背後には、無数の死骸が積み重なっている。そして、この戦争に射幸的に生き延びた退役軍人たちに刻印された傷、人間の内にははさまれている無意識の深淵によって、ある者は狂気に陥り、ある者は死に至る。この第二の闘争に専心するのが精神分析である。

ところで、この刻印された傷は、それとして現れることはない。「人間の子どもとして生き延びるということ、これこそ、すべての人間が大人として乗り越えてきた試練であった。彼らは永久に記憶喪失になりながらも、この勝利の証人であり、しばしばその犠牲者でもあった。しかも、人間としての生死をかけたこの戦いから受けた傷、障害、疲労感を最も押し黙った、すなわち、最も目立つみずからの内部にかかえながら」⁸⁾。ここで永久に記憶喪失になるとは、どういったことを意味しているのか。記憶の背後にある最も深淵な闇でありながらも、最も明るい現実へと現れるもの。以下では、記憶の問題から始めて、この様相について詳しくみていくことにする。

3. 小児健忘と隠蔽記憶——構成主義

われわれ一般にみられる子ども時代の記憶の不確かさ、すなわち「小児健忘 (infantile Amnesie)」に関してフロイトは、以下のように述べている。「この時期のことは後になると、若干のわけの分からない記憶の断片しか心に残らなくなってしまう……どうしてわれわれの記憶は、われわれのほかの心的な活動の背後にこんなにもとり残されてしまっているのだろうか」(DAS: 75: 40)。そして、このとり残された印象は、われわれの心的生活にきわめて深い痕跡を残し、その後の発達全体において決定的なものとなると考えられている。

ところで、この記憶喪失は、記憶が別の些細な記憶によって置換され覆い隠されていることで、逆にその存在を遡及的に捉えられると考えられている。いわゆる「隠蔽記憶 (Deckerinnerung)」の問題である。フロイトは、「『詩と真実』中の幼年時代の一記憶」(1917)において、ゲーテの自己物語を解釈していく。「ゲーテは、幼年時代のごく初めのころ (四歳以前?) に起こったらしい、そして彼自身が覚えていたらしい、たったひとつの事件を物語

るのである」(KDW: 15: 318)。ゲートの記憶に鮮明に残っているこの事件は、家の瀬戸物を窓の外へ投げ飛ばすという子ども時代の無邪気ないたづらに関するものであるが、なぜこのような一見些細で無意味に思われる出来事の記憶を老ゲートが後生大事に抱え込んでいたのか。そこにフロイトはゲートの弟、新しく誕生し母親の愛を奪ってゆく闖入者に対する嫉妬と敵意、殺したいという願望を読み取っていく。

ここでの問題は、この解釈が正しいかどうかといったことではない。一見些細な記憶が本人でもよくわからないままに人に連れ添ってゆくとき、その記憶は何かしらを隠蔽するものであり、それは明示的には現れて来ないという見方こそが肝要である。すなわち、「小児健忘は、この隠蔽記憶によって完全に置き換えられ代表されているという印象を受けた。この隠蔽記憶の中には、幼児生活の中にある本質的なものにとどまらず、要するに一切の本質的なものが保たれているのである」(EWD: 128: 50)。

ところが一方で、記憶一般に関する次のような指摘がなされる。「そもそもわれわれは幼児期からの意識的な記憶を持っているのか、それともただたんに幼児期に関する記憶を持つにすぎないかは、本来不確かな問題なのである」(ÜD: 553: 34)。この叙述が意味しているのは、われわれ一般の幼児期の記憶が示してくれる幼児期というものは、かつてのままの純粋な幼児期では決してなく、作り変えられたものでしかないということであり、その純粋な抽出の不可能性である。もしくは、このスタンスにおいては、遡及的に捉えられた隠蔽されたものとは、構成の産物として考えられている。「幼児期記憶は、よくいわれるようにこの再生の時期に浮かび上がってきたのではない。むしろそれはそのときに形成されたのである」(ÜD: 554: 34)。これらの記述は、近年の「構成主義 (constructionism)」もしくはナラティブ・セラピーなどが前提とするスタンスを想起させる⁹⁾。

例えば、狼男の症例における以下のような記述はその典型である。「これらの幼児期の光景は、分析治療中に——今までの私の経験の範囲では——記憶の想起として再生されるのではなく、それらは構成の産物なのである」(AGN: 79: 388)。そして、「幼い早期幼児期に目撃されたシーンで、しかも、その後病歴に対して著しい意義を持つような内容を有するシーンは、通例は

記憶として再生されるものではなく、むしろ数多くの標示を総合しながら骨を折って一步一步推定——構成——されねばならないものである」(AGN: 80: 389)。

しかし、本稿の目的は、子ども時代の記憶は構成されたものであるというテーゼについて、フロイトが既述していたということを強調する点にはない。以上の議論は、フロイトの文脈では快感原則に則った話の筋にすぎない¹⁰⁾。すなわち、人間は思い出すときに苦痛や不快を伴う記憶は思い出さないし、思い出すにしても歪曲や置き換えといった贗造を行い妥協形成するということである。そこで子ども(時代)とは、意識において構成可能で、表象可能な子ども、ただの〈内なる子ども〉である。

対して、フロイトは「快感原則の彼岸」を自分のそれまでの理論に矛盾する怖れを承知で導入した。それは、快感原則のもとに受け入れられる形で構成される記憶の問題ではなく、アルチュセールが述べていた、永久に喪失している記憶が大人のなかに尾をひく「効果」へと繋がっている。その「効果」を与える傷・刻印とは、大人が内に抱え持つ自らにとって馴染みのない〈子ども〉とでもいべきものであり、いわば〈内なる他性としての子ども〉である。

4. 〈内なる他性としての子ども〉——構成主義を越えて

よく知られているように、フロイトは「快感原則の彼岸」(1923)において、外傷神経症の位置付けを検討するなかで、それまでの自らの理論枠組みを組み直し、反復強迫や死の欲動といった概念を提出している。患者は外傷的な出来事を考えないように努めているにもかかわらず、傷に固着し、その苦しい経験を繰り返し生き直す。フロイトは、この反復強迫を快感原則を越えるものとして捉えるしかなかった。治療関係において、「患者は自分の中で抑圧されているものをすべて想起することができないのである。おそらくもっとも本質的なものこそが想起できない。……医者は抑圧されたものを、過去の一場面として患者が想起する(erinnern)ことを望むものであるが、患者は抑圧されたものを現在の経験として反復する(wiederholen)しかな

いのである」(JL: 16: 159)。

ここで「想起」と「反復」が明確に区別されていることに注意したい。快感をもたらす可能性のまったくない過去の体験は、記憶として想起し再生するようなものでも、贗造され構成されるようなものでもなく、ある強迫によって駆りたてられ、再現・反復され、生き直しを迫る。これは、いわば「宿命」のようなものであり、快感原則を凌いでいる。「被分析者にとっては、幼児期の出来事を転移において反復する強迫は、いかなる場合にも快感原則を越えたものであるのは明らかである。患者はその際に、まるで幼児のようにふるまい、自分の原始期の(urzeitlich)経験の抑圧された記憶痕跡が、自分にとって拘束された状態で存在していないこと、ある程度までは二次過程に従うことができないことを分析者に示すのである」(JL: 37: 172)。

ここで二次過程とは、とりあえず意識の作用であり記憶を受け入れられる形に加工し構成する働きだと考えてよい。外傷体験はこのような作用に従わず、私のコントロールの外部から生き直しを強迫してくる。

ここでフロイトを少し離れ、その外傷理論を取り上げたラカンの議論を追うことにする。ラカンは、事後的・構成的な歴史の物語を内側から突き崩してしまうような「穴」、「語りえないもの」の存在(非存在)について語っていた。それは言表行為の「私(je)」と言表内容の「私(je)」のズレ、疎外の場所に開いている裂け目、無意味の部分であり、それこそが無意識を構成するとされる¹¹⁾。ラカンは、このような言葉、語りの世界(象徴界・シニフィアンの網であり快感原則が支配するところの「オートマトン(automaton)』)から排除され、その彼岸にあるものを現実界と名付け、われわれが現実界と出会うことをアリストテレスから借り受け「テューケー(tuché)」と呼ぶ。そして、物語ること(象徴化)の外部にあるとされるものの一つが外傷である。「『テューケー』の機能、出会いとしての現実界の機能は——出会いといっても、それは出会えないかもしれない出会い、本質的に出会い損なったものとしての出会いですが——精神分析の歴史の中では、この点だけでも我々の注意を引くに十分な形、つまり外傷という形で登場しました」¹²⁾。現実界、それは主体の始源であり無意識の核である。よく知られているように、ラカンはフロイトのテーゼ「かつてエス(それ)であったところを自我(私)にしなけ

ればならない (Wo Es war, soll Ich werden)) (NEP:86:452) を読み替え、エスの優位を主張したといわれる。すなわち、「主体 (= 私Ich: 引用者) 自身はそこに、つまり「それがあつたところに」——先取りして言うと、現実界に——自身を再び見出すために、そこにいるのです」¹³⁾。そして、現実界の露呈という特権的な経験は、「絶対的他者、あらゆる間主観性を越えた他者に対して築かれる関係によって特徴づけられる」¹⁴⁾ という。この絶対的に他なるものこそ、〈内なる他性としての子ども〉と呼ぶに値する¹⁵⁾。

現実界の露呈に関して、ラカンは、フロイトが「イルマの注射の夢」の中で彼女の口の奥に見た白い膜に覆われた鼻甲介状のものについて次のように述べる。「一度も見たことのない肉の発見、物事の奥底、表面とか顔の裏側、すぐれて秘密のもの、神秘の最も深いところすべてがそこから出てくる肉、苦しんでいる肉、形のない肉、形があつたとしてもその形がまさに不安を引き起こすような肉。不安の視覚化、不安の同定、『お前はこれだ』という究極的な啓示、つまり『お前はこれだ、つまりお前から最も遠いもの、最も形のないもの』」¹⁶⁾。この喉の奥の肉、名付けられない不安をかきたてるものは、原始的な対象であり、「すべての生命がそこから出てくる女性性器という深淵、すべてが飲み込まれる口という深淵、そしてまたすべての生命が終りに至る死のイメージ」¹⁷⁾ である。

5. 誕生と死の方へ

フロイトにおいて身体の前初のモードは口腔的なものであり、ものを口という内と外の境界に位置する穴から試食し、体内に取り込むか吐き出すかを決定する。もしくは、この営為自体が内部と外部を境界づける。そしてこの受容か排除かという前初的な判断が、その後の肯定と否定、善いと悪い、主観と客観などの一連の判断機能の基盤となる (DVN: 359: 13) ¹⁸⁾。それゆえ、リビドー発達の第一段階には口唇期なるものが設定されている。先のラカンの指摘では、この喉の奥、口という穴の深淵に、誕生と死が重ね合わされた。本節は、この二つの外源性・他性に関する考察にあてられる。それは、人の一生を一本の線分として描いてみると、その両端の薄ぼんやりとした領野

で起こる出来事、もしくはその向こう側の世界が「いまここ」の生にいかにか
食い込んでくるのかという問題であると、とりあえずは表現できる。

1) 誕生、もしくはそれ以前のフラッシュ・バック

フロイトは「無気味なもの」(1919)において女性性器に関して次のように述べている。「神経症患者が、女性性器はどうもなにか気味が悪いということがよくある。しかしこの、女性性器という無気味なものは、誰しもが一度は、そして最初はそこにいたことのある場所への、人の子の故郷への入口である」(DUH: 258-59: 350)。フロイトは、反復強迫が支配する「無気味なもの (das Unheimliche)」が、心的生活にとって何ら新しいものではなく、その対語である「慣れ親しんだもの (das Heimliche)」に一致するという。秘密で隠されるべき最も疎遠な深淵でありながらも、異様な近さをもって繰り返し現れてくるもの。それは、人間の「故郷の (heimlich)」場所の現れである。その場所へと帰ることは、「自分がまだ外界や他の諸自我から截然と区別されていなかったような時期への退行である。私はこれらのモチーフが無気味なものの印象喚起に与って力あるものと信じている」(DUH: 249: 343)。敷衍すれば、子ども時代を遡り、女性性器なる近くて遠い無気味な入口を通り抜けて辿り着く母胎内とは、母子未分・母子一気的な全能的世界である。

ラカンのいう現実界とは、このような主体の始源にその場所を占めている¹⁹⁾。そして、アルチュセールのいう闘争とは、この生まれ堕ちる瞬間の危機における戦いを含み込む。そして、そのときに人は「出生外傷 (Geburtstrauma)」を負う。フロイトはそれを不安の起源としての母胎からの分離という形で述べていた。「不安の感情の場合、われわれは、それがどのような早期の印象を反復の形でふたたび心に浮かび上がらせるのかということを知っています。それは出生行為だ、とわれわれは申したいのです。このときには不快感、娩出の興奮および身体感覚などの集合化が行なわれるわけですが、これが生命の危険の生ずることの原型となり、それ以来、不安状態としてわれわれによって繰り返されるのです」(VEP: 411: 326)。この第一の闘争によって生じた原型としての古傷は「無気味なもの」の印象を喚起し、大人はここから第

二の闘争へと向かうことを余儀なくされる²⁰⁾。

ところで、遡りの過程はこの母胎内が終着点ではない。その先に待つのは、さらに原初のシーンすなわち「原光景 (Urszene)」である。両親の性交場面という原光景を目撃する外傷体験それ自体は、子ども時代のものである。しかし、人はそこに主体の始源の深淵を垣間見る。新宮一成は、フロイトの概念規定から発展させて次のように述べている。「原光景が外傷的であるのは、道徳的であるべき親がそこで性的な営みをしているからというだけではない。むしろ、主体が、自らの生存の始まりを尋ねてゆくとき、それ以上は先に進めない闇にぶつかって、やむなくそこにそのような映像を置かざるをえないということが外傷的なのである。本来の外傷は、我々の一人一人が、自らの生存の始まりを、もはや直接には体験できないということである²¹⁾。原光景とは、〈内なる他性としての子ども〉を遡ってたどりつく喪失点の幻影である。ここにおいて、アルチュセールのいう永久の記憶喪失の意味は究極の点へと辿り着いた²²⁾。私は私の出発点を永久に喪失している。それは、私の始まりという虚焦点においては私それ自体が存在しないからであり、この記憶は記憶されえぬ記憶だからである²³⁾。

2) 死のフラッシュ・フォワード

外傷体験を反復し生き直すという出来事と、「欲動 (Trieb)」との関係をフロイトは以下のように述べる。「欲動とは、生命のある有機体に内在する強迫であり、早期の状態を反復しようとするものである」(JL: 38: 172)。欲動とは反復を執拗に求めるものであり、それが回復しようとするのは、生命以前の状態である。したがって、「すべての生命体の目標は死であると述べることができる。これは、生命のないものが、生命のあるもの以前に存在していたとも表現することができる」(JL: 40: 174)。このようにして、欲動のなかでも最も本源的とされる「死の欲動」の概念が提出される。生命のあるものは、それ以前の状態であるところの無、すなわち死を目指す。生は絶対的に遠い外部性としての死に裏張りされつつ、死 (の欲動) は生をその最も近くで内部から侵蝕し突き崩す。この突き崩しの繰り返しこそが、外傷体験の反復強迫となって現れるとされるのである。

〈内なる他性としての子ども〉は、遡って誕生以前への原光景へと辿り着いたが、実はさらに、それ以前／以後には、生の絶対的他性としての生命のないもの＝死が（非存在として）存在する。

ここで、死なる他性に関してジャンケレヴィッチ『死』（中澤紀雄訳、みすず書房、1978年。以下引用後の数字は本書の頁数を示す）に従い、いくつかの特徴を抽出してみたい。第一に、遠くして同時に近いこと。すなわち超越的であってまた内在的であること。「絶対的に他で絶対的にほかにあり（ここ以外のところ、ここ以外のものであり）ながら、しかもいたるところに現存するむこうの世界」（6）。第二に、通常（その瞬間ではなく、こちら側にいるとき）は直接現前しないこと。「太陽の燦々たる光が、われわれの目には、その耐えがたい輝きを緩和するくもりガラスの使用を必要とするように、死の暗黒は弁論の仲介という幕を通してのみ思弁の対象となる」（18）。最も明るいもの、最も暗いものは、通常、直接は体験できない。快感原則のもとでは、子ども時代の体験が構成を通してのみ記憶として意識の対象となるように。第三に、客観的な知識としては知っていながら、置換不能で特権的な私にとっては受動的に不意打ちとして到来すること。「あらかじめ準備されていた不意打ち、既知であると同時に未知、知っていて悟り、内在していながら偶来することづて！ 見出されていたものの発見は突発的ではかありえない」（13）。第四に、受動性すなわち私が委ねられるということの必然的帰結として、その到来が私のもの、私の可能性に属するものではないこと。「死は意識とかくれんぼを演ずる。私がいるところに死はない。そして死があるときには私がおもはやそこにはいない。私がいる間は、死は来るべきものだ。そして、ここにそしていま死が到来するとき、もはや誰もいない」（35）。第五に、死は通常、常に未来形（誕生は過去形）であるが、その瞬間においては時間（と空間）の距離がゼロに達し無時間的になる。「死の瞬間という鋭い尖端において、あらゆる空間上の距離とあらゆる時間上の隔たりは零となる」（34）。

これら他性・他なるものの特性に関して、第一点と第二点に関しては不十分ながらも既述した。以下では、第三点以降の受動性、非人称性、無時間性に関して掘り下げていくことにする。そこでは、非人称性を基本的な視座と

して他の二点が展開される。

6. 受動性と非人称性——無意志的記憶

主体にとって他なるものとの出会いは、つねにその自由、可能性、主導性を奪われるという仕方で行ってくる。主体は他なるものの到来に対して絶対的に受動的である。フロイトは外傷体験の反復に関して次のようにいう。「人々はこうした現象をみると、宿命が自分を追いかけてくるとか、あるデモニッシュな性格が自分の経験にまとりついているという印象を受ける」。そして、このような「同一物の永劫回帰」に囚われた人は「自分で影響を及ぼすことができず、受動的に経験するようにみえるのに、いつも同じ宿命を反復している」(JL: 20-21: 161-62)。

ここで、ベンヤミンの議論を取り上げ、その身体把握を媒介にして受動性について考察したい。それは、心的外傷のようなショック体験に関して、ベンヤミンがベルクソン—ブルーストについてフロイトを参照しつつ述べているところである。ブルーストは自分の幼年時代について報告するという困難な課題を背負い、意識=構成の支配下にある意志的記憶に対置して、無意志的記憶の概念を編み出す。「ブルーストの言い方に翻訳すればこうなる。無意志的記憶の構成要素になりうるのは、はっきりと意識をもって〈体験された〉のではないもの、主体に〈体験〉として起こったのではないものである。興奮過程から『記憶の基盤としての持続的痕跡』(フロイト『快感原則の彼岸』)を収集するのは、フロイトによれば、意識とは別ものと考えられる〈他の諸体系〉の役割である」²⁴⁾。心的外傷のようなショックは、意識という刺激保護の防衛を突き抜けて、意識とは別の場所に刻まれる。〈他の諸体系〉とは、もちろん無意識のことなのであるが、ブルーストにおいては手足において代表されるもので、身体に貯蔵されているとされる〈四肢の無意志的記憶〉は、「腿や腕、あるいは肩甲骨がベッドのなかで、昔あるときとった位置を無意志的にまたとるとき、そのようなイメージが意識のなかに、その招きに従ってではなく、直接に侵入してくる」²⁵⁾。もちろん、ここで有名なマドレーヌ体験が想起される。その瞬間を簡単に振り返っておこう。

「お菓子のかけらのまじった一口の紅茶が、口蓋にふれた瞬間に、私は身ぶるいた、私のなかに起こっている異常なことに気がついて。……それは沈んでいる場所から動き、上にあがってこようとする何かであり、非常に深いところで、錨のようにひきあげられようとした何かだ」²⁶⁾。

この身体的な深いところの層にある〈無意志的記憶〉は、「私（主体）」が何かを思い出すという招き入れの形ではやってこない。回想が突如として「私」を襲い、「私」に現われ侵入してくる。この到来において、「私」は徹底的な受動性に曝される。そして「私」が崩壊しはじめるとともに、そこにはもはや「私」はいなくなる²⁷⁾。

これは、フロイト（の第二局所論）における「私＝自我（Ich）」と「それ＝エス（Es）」の関係として捉えられる²⁸⁾。「『私（Ich）』よりもずっと範囲が広く、大規模でしかもはるかに暗い心の領域があるのを認め、これを『それ（Es）』と呼んでいる。……『それ（Es）』というのは非人称代名詞のesをかりてきたわけだが、この用語には、普通一般の人たちが使うある種の言い廻しとの直接の関連が意識されている。『それが私をときめかせた（Es hat mich durchzuckt）』、『それはこの瞬間において私より強力な何かであった（es war etwas in mir, was in diesem Augenblick stärker war als ich）』、『それは私より強かった（C'était plus fort que moi）』などという言い方がその実例だ」（FL: 222: 170-71）。広大で深淵な「それ」に対して「私」は受動的であり、「私」は「それ」という非人称性に圧倒される。そのような意味において、「私はおのれ自身の家のなかで主人ではない」（SP: 11: 331）というフロイトのよく知られた言葉は発せられている²⁹⁾。

ここで簡単に人称性の問題に着目しておこう。一般的かつ無名で客観的な分析の対象となる子どもを「三人称の子ども」、私の親近で第一の他のものとしての子どもを「二人称の子ども」、そして私自身の内部に抱え持つ子ども（時代・性質・存在）を「一人称の子ども」と呼ぶこととする³⁰⁾。そのとき「一人称の子ども」とは、私という主体によって捉えられ、表象され、構成されるものであるとする。しかし、「一人称の子ども」という領野に開いた穴、遡及した先に現れる喪失点としての記憶にならない記憶、非存在という存在から到来する〈内なる他性としての子ども〉は、私に受動性を暴力

的に強いつつ、私を解体していくような「非人称の子ども」であると言える。

7. 無時間性——事後性を越えて

〈内なる他性としての子ども〉という記憶・イメージ・体験・存在は、垂直的に到来するため、線型的な意識レベルの時間的把握自体の外部に位置する現象である。従って、他性からの強制的な力によって「私」が「生き直し」を迫られること、「私」が他性に呑み込まれるという事態は、線型的な時間意識からくる事後性や退行といった認識の仕方では把握できない。フロイトは、無意識には「時間がない」(DU: 286: 102)と言っている。「カントは、時間と空間がわれわれの思考の必然的な形式であると述べたが、精神分析によって得られた知見から、この命題を改めて検討することができるようになった。無意識的な心的プロセスは『無時間的』であることが明らかになってきた。こうした無意識的な心的プロセスは時間的に配置されていないし、時間がこれを変えることはなく、これに時間表象をあてはめることができないのである」(JL: 27-28: 166)³¹⁾。

退行は時間的な遡りでありつつ、局所論的・空間的な後退を意味するが、それを「意識から無意識への退行」といったとき、〈意識＝時間のあるところ〉、〈無意識＝時間のないところ〉、〈退行＝時間を遡ること〉、とするなら、それは「時間のあるところから時間のないところに時間を遡る」という奇妙な文章となってしまう。時間のないところの全面化こそが、〈内なる他性としての子ども〉の到来であり、この現象を線型の時間の枠組みにおいて語り直すとき、それは事後性や退行といった表現にならざるをえないのである。従って、このような表現は、近代的な進歩・発展・発達する経過系の時間意識とワンセットであるといえよう³²⁾。そもそも語るという行為自体、そして言葉そのものが疎外の構造において成立している以上、「(子ども時代の) 経験を語ることは事後的な構成である」というように言ったとき、それは線型時間の枠組みのなかでのトートロジーにすぎない。

ラカンは、「イルマの注射の夢」を解釈していくなかで退行について次の

ように述べている。「この夢の中でその時に起きた深刻な解体を説明するのに、退行の過程という言い方をすることができるでしょうか。主体の関係は完全に変化しています。主体はまったく別のものになり、もはやフロイトはいません。私 (je) と言うことのできる人物はもはやいません」³³⁾。

すなわち、そのとき人は「大人」としての「私」ではなくなり、「子ども」に呑み込まれてゆく。〈内なる他性としての子ども〉の到来は、「大人」としての「私」の主体的な企てではない。「大人」（という主体）が「子ども」になることはできない。

意識は退行する。しかし、同じことを無意識の方からいえば無意識が現前するのである。「内なる他性としての子ども」に回帰・退行するのではなく、〈内なる他性としての子ども〉が到来するのだ。人にとって時間が線型のものとして現れているとき、すなわち意識に身を据えているとき、人は何かを発達や退行と呼ぶ。逆に、無時間的な世界が現前するとき、すなわち無意識に身を据えているとき、何かを呼ぶべき人はそこにはいないということになる。

8. 子どもとふれあうこと——無分節の領野へ

〈内なる（もしくは外なる）他性としての子ども〉との出会いは「ふれる」という仕方でやってくるといえるかもしれない。「子ども」を見る、「子ども時代」を振り返りつつ語るなどといった構成主義的な見方をするとき、そこには見るものと見られるもの、語る主体と語られる過去との主客分離を前提とした「対象／表象としての子ども」が見出される。しかし、「子ども」にふれるとき、ふれるものとふれられるものが互いに交叉・侵犯し合う。坂部恵は、「ふれる」ことについて次のように述べている。「『ふれる』ことはつねに『ふれ合う』こと、いうなれば、惰性化した日常の領域の侵犯であり、能動-受動、内-外、自-他の区別を超えた原初の経験である」³⁴⁾。

この出会いは何らかの程度において破壊的な出来事である。精神分析の転移・逆転移関係は、分析家と被分析家、互いの「外なる他者性」そして「内なる他性」の交錯・相互浸透であり、いわば意図的に「気がふれる」状態

(転移神経症)を創出するという意味での「ふれ合い」であるといえよう。坂部は、その非人称性について次のように述べている。「気がふれるという経験においては、日常の構造安定的な布置としての自我同一性が根底から脅かされ、揺り動かされる。われわれは、そこでは、もはや我、汝、人などの人称性を超えまたそれら人称性の生成の原点ともなる場所との出会いという一種形而上学的な経験に立ち合うことになる」³⁵⁾。

ふれるものが、ふれられるものでもあることで、「大人」(もしくは主体として「私」といった存在／意識を確保していた輪郭が崩れ始め、「大人」と「子ども」という、能動-受動、内-外、自-他といった分節は溶解し、その根底にある無分節の場へと誘われることになるだろう。

9. おわりに

以上、本稿は精神分析が教育学、死生学に寄与しうる可能性の一端を探究するための基礎的考察を試みた。

まず教育学に関しては、「大人が子どもについて語る」もしくは「大人が大人と子どもの関係について語る」という営為そのものにまつわる問題性に光をあてようとした。それは、語りや思考の限界点に関する分析であり、大人と子どもの人称性(客観的な三人称、臨床的な二人称、実存的な一人称さらには非人称)の考察であり、大人と子どもの二分法そのものを問い直すものである。

次に死生学に関しては、死という出来事そのもの、その瞬間の固定的な「写真」により関心を持つ従来の「死生学」に対して、人の一生をプロセスとしてみる視点から、誕生と死、もしくはそれ以前／以後のシーン(非シーン)が、「いまここ」の生に与える「効果」の問題を「子ども」という記憶、感覚、性質を媒介として俎上にのせた。それは、逆説的だが人生のプロセスという連続性に裂け目を刻みつける断絶、否定性の契機であり、線分の両端という眩いばかりの暗黒が可視的な内部へと侵蝕し、線形の流れを解体させる様相を開示させるものである。

最後に、教育学と死生学の関連について、やや唐突にはなるが記しておく

たい。教育というかつては無意識的な伝達様式を持っていた営為が、「学」として問題となるのは、目的意識的に働きかけ、文化や知を教え、世代継承させ、社会を維持していかなければならなくなったからこそである³⁶⁾。その意味では、死生学そしてデス・エデュケーションなどのニーズが生じる背景も同様である。死とはいったい何であり、死をどう受け止めたらよいかであるとか、死の作法、死生観などがこれだけ問題として浮上してくるのは、「死の知」が無意識的に伝達され共同体が維持されてゆくといった状況が崩壊したことの証なのかもしれない。従って、「死の知」をどのように扱うのかといった問題は、近年教育学において改めて議論されている「教育は何がどこまで可能か」といったような原理的な議論とパラレルであり、両者の領域連携が今後さらに重要になってくると思われる。

フロイト文献

フロイトの著作からの引用に関しては、その都度注記する煩を省くため、以下の略記号、Fischer Verlag刊行のGesammelte Werke (G.W.)の頁数、人文書院刊の『著作集 (著)』の頁数の順に区切って示した。

ÜD: Über Deckerinnerungen, in: G.W., Bd.1, 1899 = 「隠蔽記憶について」著6

DAS: Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, in: G.W., Bd.5, 1905 = 『性理論三篇』著5

EWD: Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten, in: G.W., Bd.10, 1914 = 「想起、反復、徹底操作」著6

DU: Das Unbewusste, in: G.W., Bd.10, 1915 = 「無意識について」著6

VEP: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, in: G.W., Bd.11, 1916-1917 (1915-1917), = 『精神分析入門』著1

SP: A pszichoanalízis egy néhezszégeröl, (Eine Schwierigkeit der Psychoanalyse), in: G.W., Bd.12, 1917 = 「精神分析に関わるある困難」著10

KDW: Eine Kindheitserinnerung aus "Dichtung und Wahrheit", in: G.W., Bd.12, 1917 = 「『詩と真実』中の一記憶」著3

- AGN: Aus der Geschichte einer infantilen Neurose, in: G.W., Bd.12, 1918 = 「あらゆる幼児期神経症の病歴より」著9
- DUH: Das Unheimliche, in: G.W., Bd.12, 1919 = 「無気味なもの」著3
- JL: Jenseits des Lustprinzips, in: G.W., Bd.13, 1920 = 「快感原則の彼岸」著6
- DVN: Die Verneinung, in: G.W., Bd.14, 1925 = 「否定」著3
- FL: Die Frage der Laienanalyse, in: G.W., Bd.14, 1926 = 「素人による精神分析の問題」著11

付記 本稿は科学研究費補助金による研究成果の一部である。

注

- 1) 西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993年、75頁。
- 2) ちなみに、後述する「原光景 (Urszene)」には、映画や演劇における「シーン」という連想が含み込まれている。
- 3) 〈内なる子ども〉もしくは「インナーチャイルド」は、子ども時代に傷ついた心として、しばしば癒しや自己実現といった文脈で使用されてきた。とりあえず以下を参照。Bradshaw, J., *HOMECOMING: Reclaiming and Championing Your Inner Child*, New York: Bantam Books, 1990 = 新里里春監訳『インナーチャイルド』NHK出版、2001年。また、以下で中心的な概念となる〈内なる他性〉については、H・ワロンの〈内なる他者 (l'autre intime)〉を想起しておいてもよい。西平直「〈私〉をどう理解するか——H・ワロンの〈内なる他者〉を手がかりに——」『東京大学教育学部紀要』第26巻、1986年、参照。
- 4) 十川幸司『精神分析』岩波書店、2003年、参照。
- 5) 特に発達論の枠組みとして妥当か否かが議論の焦点となる。例えば勝田守一によるフロイトの性欲説やエディプス・コンプレックス論への言及（『人間の科学としての教育学 勝田守一著作集6』国土社、1973年、84頁）、堀尾輝久によるA・フロイトの参照（『人間形成と教育』岩波書店、1991年、138頁）等がある。精神分析的教育学については、後藤卓也「精神分析的教育学の歴史的展開と基本的視座」『東京大学教育学部紀要』第31巻、1991年、参照。さらに、特にアメリカの児童中心主義、進歩主義的教育において、精神分析が精神衛生運動の流れの中で、神経症の予防という名目で浸透していく

という教育のメディカライゼーションの歴史を分析したものとして、以下の文献を参照。Cohen, Sol., *Challenging Orthodoxies: Toward a New Cultural History of Education*, New York: P. Lang, 1999. いずれにしても、これらの議論は、これまでの精神分析が「子どもの精神分析」、「子ども理解のための精神分析」であったり、分析家と被分析家の治療関係を大人と子ども、教師と生徒の教育関係に重ねて考えようとするものであることを示している。

- 6) 以下の論考に非常に示唆を受けた。森田伸子「ポストモダニズムとインファンス」『現代教育学の地平』南窓社、2001年。また、ジャン＝フランソワ・リオタール『インファンス読解』小林康夫他訳、未来社、1995年、参照。
- 7) ルイ・アルチュセール、石田靖夫他訳『フロイトとラカン』人文書院、2001年、38頁。
- 8) 同上、38頁。
- 9) とりあえず、以下の文献を参照。上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、2001年。シーラ・マクナミー、ケネス・J・ガーゲン編、野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践』金剛出版、1997年。一方で、浅野智彦はガーゲンのような「関係論的自己論」に対して、それのみではなく、物語の穴、「語り得ないもの」についての考察を導入するような物語論的アプローチを提唱している（『自己への物語論的接近』勁草書房、2001年）。
- 10) 後期ラカンで言うならば、快感原則は象徴秩序と等価であり、その彼岸が現実界ということになる。
- 11) J・ラカン『精神分析の四基本概念』小出浩之他訳、岩波書店、2000年、参照。
- 12) 同上、73頁。
- 13) 同上、59頁。
- 14) J・ラカン『フロイト理論と精神分析技法における自我（下）』小出浩之他訳、岩波書店、1998年、6頁。
- 15) 自らの内部でありつつも他なるものであるという一見した矛盾に関しては、ラカンの「外密性（L'extimité）」すなわち外的な内密性に関する議論が想起できよう。
- 16) J・ラカン『フロイト理論と精神分析技法における自我（上）』小出浩之他訳、岩波書店、1998年、258頁。

17) 同上、273頁

18) これは、ラカンにおいては「排除 (focclusion)」として焦点化された問題であり、象徴界から排除されたものは現実界に回帰するとされる (J・ラカン「フロイトの〈否定〉についてのジャン・イポリットの評釈に対する回答」佐々木孝次訳「エクリII」弘文堂、1977年、参照)。J=D・ナシオは狼男の幻覚について次のように述べている。「これは、実在すべきだったはずのことばが、すなわちその子が語るはずだったことばが、現実界に回帰して現出することをはっきり示している。衝撃を受けたその子は声がだせず、彼のことは象徴的なものとして語られることなく、幻覚像という現実に変容してしまったのである」(『精神分析 7つのキーワード』親曜社、1990年、248頁)。

19) 西谷修は、現実界に関して以下のように述べている。「それは、人間が〈人間〉となるためにそこを立ち去った〈ふるさと〉であり、へその緒のように断ち切られた人間の〈幼年期〉なのである。〈世界〉が崩壊するとき、それが人間的秩序に属さない〈現実〉として、〈非人間的なもの〉として回帰してくる」(西谷修『戦争論』講談社、1998年、177頁)。同『不死のワンダーランド』(講談社、1996年)参照。本稿は上書より多くの示唆を受けている。

20) ちなみに、エリクソンのいう「基本的信頼 (basic trust)」とは、まさにこの母胎からの分離、母子二極化という出来事で生じる傷に対して与えられる安心感や癒しを意味しているといつてよい。さらに不安の問題としていうなら、自分がまだ母親のおなかの中にもいなかったとき、自分がまったく存在していなかったという事実に関する凍りつくような戦慄としての「形而上学的不安」の問題である。エリクソンは、すべての宗教の基本的課題の一つが、この最初の母子関係の再確認であるという。「というのは、私たちは自らのうちに、本物の形而上学的 (meta-physical) 不安を、生涯にわたって続く不信感として深く抱えているからである。『meta』は『背後に・越えて』を意味するが、ここではむしろ『前に・戻って・最初に』の意味になる」(Erik H. Erikson, *Young Man Luther: A Study in Psychoanalysis and history*, W. W. Norton & Company, Inc., 1958, p.115 = 『青年ルター1』西平直訳、みすず書房、2002年、182頁)。

21) 新宮一成『ラカンの精神分析』講談社現代新書、1995年、109—10頁。

22) 精神分析思想において、この点よりさらに遡ったのがユングである (西平

直『魂のライフサイクル——ユング・ウィルバー・シュタイナー』東京大学出版会、1997年、参照)。本稿では前世やその記憶といった問題にまでは立ち入らないが、フロイトにおいては、原光景を含めた「原幻想(Urphantasien)」が、人類の太古の記憶の系統発生的な継承であると想定されている。以上の点に関連して、フロイトとユングの差異に関する思想史研究として以下を参照。下司晶「フロイトとユングの分岐における〈人類の先史としての子ども〉—精神分析と起源をめぐる視線—」『東京大学教育学部紀要』第43巻、2004年。

- 23) ジャン＝リュック・ナンシーは『訪問』において、記憶にないほど古いものについて次のように述べている。「私たちが前にして倦むことなく露呈された現前、すなわち身震いに貫かれた胎内。私たち自身は、生ずる以前、死して以後、つねに新たに無記憶／過剰記憶の眩いばかりの想起のうちにあり、あるいは世界の早暁と黄昏の記憶されえぬ記憶のうちにある」(西山達也訳『訪問』松籟社、2003年、47—48頁)。
- 24) ヴァルター・ベンヤミン「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」浅井健二郎編訳、久保哲司訳『ベンヤミン・コレクションⅠ』ちくま学芸文庫、1995年、427頁。
- 25) 同上、480頁
- 26) マルセル・ブルースト『失われた時を求めてⅠ』井上究一郎訳、ちくま文庫、1992年、74—76頁。
- 27) 垂直的現前がアイデンティティからの解放につながることは、今井康雄が指摘している(『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想』世織書房、1998年)。
- 28) エスは〈内なる他性としての子ども〉と接続している。ブルーノ・ベッテルハイムの言葉をあげておきたい。「ドイツ語では『子ども』(das Kind)という語は文法的に中性である。ドイツ人は誰しも、幼年時代に中性代名詞esで呼ばれるという経験をしている。この事実から、『エス』(das Es)という語には特殊な感情が付与されており、ドイツ人の読者に自分がかつて呼ばれた名であることを思い起こさせる」(『フロイトと人間の魂』藤瀬恭子訳、法政大学出版局、1989年、80頁)。
- 29) 木村敏は、フロイトやハイデggerなどのエスを関連づけつつ、「『エス』はわれわれを生かしている『生命そのもの』のこゝろ」であると述べている(『エスについて——フロイト・グロデック・ブーバー・ハイデgger・ヴァ

イツゼッカー」『思想』1995—6)。木村は神話学者ケレーニーの「ビオス」と「ゾーエー」の区別を自らの理論枠組みに導入しているが、「ゾーエー」こそが「生命そのもの」である。ちなみに両者の区別はアガンベンによっても取り上げられており、それもまたフロイトの「自我」と「エス」の別に対応させられている（『人権の彼方に』高桑和巳訳、以文社、2000年、40頁）。木村とアガンベンにおける解釈の差異と連関や、アガンベンの枠組みのラカン—ジェクとの類似性などについては稿を改めて論じたい。ちなみに、「生命そのもの」、「いのち」的なるもの、すなわち生（もしくは死）の個を越えた共同性・全体性を打ち出すという所作は、オリエンタリズムの内面化ともいえる側面があり、パーソン論的な生命観の反作用でありつつ、それと共犯関係に陥る恐れがある。教育の文脈においては、大いなる生命への畏敬の念を育てよと謳う新国家主義と、セルフ・リライアンスを奨励する新自由主義が補完関係にあることが、しばしば指摘されている。

- 30) 各々の子どもに対応して、もう一方の対である大人（であること）の呼び名も変化する。すなわち、「三人称の大人」は教師や大人一般などであり、「二人称の大人」は親であったり、「一人称の大人（であること）」は市民・主体・コギトとしての私であると言える。教育学者や発達心理学者など教育を語る者は、時と場合によって、これらの様々な位置に同時に立つ。さらに、デス・エデュケーションの文脈では、大人が子どもに（一人称／二人称／三人称の）死に関して何をどのように語るができるのか、もしくは語るべきなのかといった問題が浮上してくる。精神分析の可能性の一つは、この人称問題の絡み合いを解き分けることにあるといえるかもしれない。
- 31) 無意識の無時間性に関する考察としては以下の文献を参照。マリー・ボナバルト、佐々木孝次訳『クロノス・エロス・タナトス』せりか書房、1978年。
- 32) 〈内なる他性としての子ども〉を媒介とした死や誕生といった他性、そしてその場としての無意識・エスが、線型時間を解体し、生の連続的な発展に断絶・否定の契機を与えることに関連して、W・ジェームズの「二度生まれ」の議論を想起してもよいかもしれない。ジェームズは、回心における潜在意識論を展開するにあたり、ジャネ、プロイアー、フロイトなどの催眠に関する議論を参照し、潜在的かつ超周辺的な生命の発達により意識の場が侵略されるという図式が一致すると考えている（『宗教的経験の諸相（上）』梶田啓

- 三郎訳、岩波文庫、1969年、351—52頁)。
- 33) J・ラカン、前掲書(上)、1998年、273頁
- 34) 坂部恵『「ふれる」ことの哲学』岩波書店、1983年、4—5頁。
- 35) 同上、38頁。
- 36) 以上の視座から、あらためて身体、環境、生命圏の危機を問い直し、精神分析の無意識概念に着目した論考として以下を参照。宮澤康人「ホモ・エドゥカンスの教育的無意識と〈自己〉の大きな物語」『教育学年報10』世織書房、2004年。

(あきやま・しげゆき 日本学術振興会特別研究員)

From “Inner Child as Otherness” to Birth and Death: Pedagogy, Death and Life Studies, Psychoanalysis

Shigeyuki Akiyama

This paper attempts to explore the possibilities of psychoanalysis in “pedagogy” and “death and life studies”.

Firstly, as for “pedagogy”, most studies have regarded psychoanalytic theory as just a supporting science and therefore have focused on the application of psychoanalysis to educational methods. On the other hand, this study sets out to re-consider the way of narrative and thinking in pedagogy and to examine the liminality of those. Particularly this study focuses on the first person’s (impersonal) perspective and the problem of “Inner Child as Otherness”. It can be defined as unknowable memories and feelings in one’s childhood which have alienated and dissociated from his or her inner conscious world. It is clarified by Freud’s notion of “infantile Amnesie (infantile amnesia)”, “Deckerinnerung (screen-memory)”, “Unheimliche (Uncanny)” and “Urszene (primal scene)”. As a result, these discussions lead us to the conclusion that the dichotomy between adults and children dissolves into no-boundary. Likewise, “Inner Child as Otherness” is connected to “Geburtstrauma (birth trauma)” and “Todestriebe (death instincts)”, consequently we can proceed to the discussion of the birth and death.

Secondly, with regard to “death and life studies”, in most studies (especially thanatologies), the main stress falls on the event of death and the moment of dying. In contrast, this study focuses on the influence of birth and death upon human life and life cycle. “Geburtstrauma (birth trauma)” is the origin of anxiety and “Todestriebe (death instincts)” is beyond

“Lustprinzip (pleasure principle)”. In my understanding, it follows from this that the influence of “Otherness” such as birth and death break the stability and continuity of human life and it dissolves the obviousness of adulthood and one’s being an “I”.